２０１７年度　個人特別研究費　研究成果報告書

所属・職・氏名：文学部・教授・大橋毅彦
研究課題：上海に亡命したユダヤ人芸術家Ｄ・Ｌ・ブロッホの評伝執筆に向けての研究
研究期間：２０１７年４月１日～２０１８年３月３１日
研究成果概要（2,000字程度）

本研究課題遂行のために、7 月上旬、8 月末から 9 月初めにかけてそれぞれ中国・ドイツで実施した現地踏査、資料収集、関係者への聞き取り調査を通じて、予期していた以上の成果を上げることができた。以下、その概要について報告する。

7 月上旬、ブロッホと戦時下の上海で出会い、戦後彼と結婚した中国人女性鄭迪秀の生地である浙江省海寧市での実地踏査を実施した。2004 年秋に次いで 2 回目の訪問であったが、今回は事前に連絡をつけることができ、当方の意図もあらかじめ伝えることができていた、鄭迪秀の姪にあたる鄭園氏とご子息の劉政氏とが同行してくれたため、ブロッホ評伝執筆に向けての数々の情報を入手することができた。すなわち、海寧の一角にある南関ショウ(「厂」の中に「相」)に鄭一族の屋敷がかつてはあったこと、鄭迪秀の父鄭甘延が工業地主と呼ばれる階層に属していたこと、文化大革命後に鄭一族の辿った運命、ブロッホとともに 1949 年にアメリカに渡った鄭迪秀がその後一度も中国には戻れなかったことなどを鄭園氏より聞き取ることができた。とりわけ鄭園氏から提供を受けた、鄭迪秀がアメリカから寄せた故郷を慕う何通もの書簡は感動的であった。

8 月末から 9 月はじめのドイツ行では、ミュンヘン、ニュルンベルク、フロスを訪問した。まずミュンヘンでは、青年時代のブロッホがそこで木版画を中心とするグラフィックデザインや水彩画を学んだミュンヘン公立応用芸術学校の跡地や、彼の作品も展示されたバイエルン・ユダヤ人文化聯盟の移動展覧会が催されたシナゴーグ(クリスタルナハトの折に焼き討ちにあう)のあった場所を確かめるとともに、ミュンヘン図書館では 1930 年代のユダヤ人コミュニティの文化活動全般の動向を知りうる新聞記事の収集にも努めた。次いでニュルンベルクでは、2004年春に次いで、ブロッホのご息女のリディア・アベル氏宅を再訪、旧交を温めるとともに、前回にもまして氏の手元に残されているブロッホの作品の数々や写真等を閲覧することができた。上海時代にブロッホが製作した作品中には、アールデコ風な趣をもって都市の光景を描いた水彩画もあることなどは新鮮な発見であった。さらに、アベル氏も同道してくださって、ブロッホの生地、オーバープファルツ地方にあるフロスの町に赴く。かつてユダヤ人のコミュニティが形成されていた地域に建つシナゴーグやブロッホの生家をはじめ、町長の Stich 氏の特別のはからいで町の一郭にあるユダヤ人共同墓地も見学、ブロッホの両親の墓とブロッホのメモリアルストーンを確かめたほか、評伝執筆に取り込めそうなインスピレーションを沸かせる素材とも出会うことができた。

こうした中国とドイツでの現地踏査を終えた研究期間後半部は、そこで得た情報を整理するとともに、ニューヨークの“Center for Jewish History”所蔵の「ブロッホコレクション」も活用しつつ、評伝の原稿執筆を行った。研究期間に入る前、400 字詰め原稿用紙に換算して 150

枚ほどの原稿をすでに執筆していたが、秋以降はそれに次ぐ章節の執筆に注力、評伝刊行を予定している勉誠出版の編集スタッフとの連絡や直接のミーティングなども間に挟んで、研究期間終了時点では第一稿のトータルは 300 枚を超えるに至った。ほぼ全体の 3 分の 2 程度の原稿が仕上がったと言えよう。出版社との当初の打ち合わせでは図版・写真も入れて最大 400 枚ほどの分量を考えていたが、現状から判断するにもう少し厚みをもった研究成果を 2 年以内に単行本として刊行できそうである。むろん、こうした作業で見えてきたこと、考えてみたことについては、吉林大学、立命館大学、神奈川大学での国際シンポジウムや連続講座、公開研究会などの場を借りて、その都度発信してきた。とりわけ、この報告書を記す直前に、上海復旦大学の文学サロンで、2017 年の研究成果を確認する意図も持ちつつ、ブロッホ評伝執筆にまつわる研究の醍醐味について語った折には、聞き手の反応もよく、自分の進んでいく方向に誤りのないことが強く実感されたことを特筆しておきたい。